

ブルーナーのナラティブ論に関する一考察

今井康晴

(2010年10月7日受理)

A Study on the Narrative Theory on Bruner

Yasuharu Imai

Abstract: The purpose of this paper is elucidation of narrative theory in Bruner. Bruner has made suggests to develop education and psychology from the proposed new look psychology. And, he insisted on the cultural psychology mainly composed of “Meaning” and “Culture” as a pragmatist, and emphasized the function of narrative. The achievements are evaluated as a pioneer in the times of the qualitative psychology. Various styles, such as a story, dialog, narration, autobiography, diary, and record, are included in the narrative. Then, the narrative theory in relations between the culture and the education in Bruner was examined from his research as a viewpoint that grasped narrative.

Key words: Bruner, narrative, story, culture, learning

キーワード：ブルーナー、ナラティブ、ストーリー、文化、学習

はじめに

心理学においてナラティブを用いた研究は、古くから行われている。例えば、ヴント (Wundt, W. 1900-1920) は自己の感覚体験を言語によって表現することで、個人の体験に接近する方法を試み、フロイト (Freud, S. 1917) は自由連想という方法で、患者の言葉に注目し精神分析を行った。1900年代から行われているナラティブに関する研究は、最近では心理学において認識論や方法論の新たな視座を生み出している。そして、個人における語り、ストーリー、物語などを通した研究は、ナラティブ・セラピー、ナラティブ・ベイスド・メディスン、として医療現場で療法として用いられている。こうしたナラティブに基づく研究や実践の方向性への変化は、いわゆるナラティブ・ターンとして各学問分野で行われている。(能智, 2006) 我が国では日本質的心理学会が先導し、ナラティブをさまざまな角度から分析し研究成果を発表している。

ブルーナー (Bruner, J.) は、ニュールック心理学の提唱から、新たな認知心理学の旗手として活躍し、発達と教育への提言を行ってきた。80年代以降、彼は

プラグマティストとして「意味」と「文化」を主体とした文化心理学を主張し、ナラティブの機能を強調した。そしてブルーナーは、自らのナラティブ論を展開し、新しい質的心理学の時代における先駆者として位置づけられている。(やまだ, 2006) 本研究では、ナラティブを捉える視角として、ブルーナーにおけるナラティブ論を彼の諸研究から明らかにし、文化や教育との関わりにおけるナラティブの意義の解明を目的とする。

1. 社会構成論としての教育

ブルーナーは心理学から教育学、あるいは文学、社会学、哲学に至るまでその造詣は多岐に及んでいる。その研究の道程を検討すると彼は、1980年代以降の主な著作において、従来の認知革命への批判を構想し、『教育の過程』などで追究されたピアジェ (Piaget, J.) の段階的発達論から、ヴィゴツキー (Vygotsky, L.) に基づく社会文化的教育を主体とした発達論へと展開した。それは、ピアジェの示す理論からの脱却ではなく両者の融合、折衷、統一という課題へのアプローチ

であった¹⁾。ヴィゴツキーにおける発達と学習の概念は、子どもの周りにある社会、文化、環境との関わりによって問題を解決することだけを量るのではなく、問題を問題として認識し、問題をつかむまでの経緯を重視した。そして彼は、文化的共同体の実践活動の参加によって、他の人々との共同作業を通して未熟な状態から成熟していく過程を「発達の最近接領域」(The Zone of Proximal Development)と提唱した。こうしたヴィゴツキーの発達観を背景とした社会文化的アプローチは、心の営みが記号や道具を媒介として発生し、他の人々との共同作業において展開された。それは、文化的歴史的産物として受け継がれていく発達と学習のコンセプトであった。

ブルーナーの関心は、子どもが社会や文化に参与していく場合、その文化のあり方が、どの表象システムの使用を重視するかによって、子どもの発達が変化するのか、ということであった。したがって、彼の発達に関する研究は、表象システムの中でも言語、特に幼児の言語獲得を中心に、文化を発達の媒介とした心の実在に迫るものであった。それは後述する著作のなかで、意味の構築および文化心理学などで論じられた。彼の教育観もまた文化としての発達理論を媒介とした、社会構成主義に基づくものであった。

Actual Minds, Possible Worlds. 『可能世界の心理』では、ナラティブへのアプローチとして、二つの思考様式を提案した。二つの思考様式は、論理—科学的な思考様式としてパラディグマティック様式と、人間ないし人間らしい意図と活動、およびそれらの成り行きを示す移り変わりや帰結を扱うナラティブ的思考様式であった。二つの思考様式の諸特性について示すと次のように示される。

論理—科学的思考様式、パラディグマティック様式の特徴は、記述や説明に関する形式的な数学的体系の理念を実現し、カテゴリー化、概念化されて関係づけられ一つの体系を形成する。そして良い理論、簡潔な分析、論理的証明、確固たる議論、推論された仮設によって導かれた経験的発見をもたらす、高度に抽象化することによって個性を超越することを求め、個別の説明的価値を否定する。結果的に、自分の前提や観察が導くところへと人は赴くことになる。

ナラティブ的思考様式の特徴は、見事なストーリー、人の心をひきつけるドラマ、信じるにたる歴史的説明をもたらす。ナラティブ様式は経験という個性、時代性を超越した奇跡を経験の個別例へと翻訳し、その経験を時間と場所の中に位置づける。ナラティブ的思考様式の産物としては、現実を仮定法化するような言語的特徴を獲得することができる²⁾。

ブルーナーは、二つの思考様式の構想において数学や科学に関する領域は論理—科学的思考様式によって支配され、ナラティブ的思考様式は看過されないというような、思考様式を分割した理念ではなかった。「二つの認知作用、つまり二つの思考様式が存在し、それぞれは経験を整序し現実を構築する特徴的な仕方をもたらしている。その二つ(相補的ではあるけれども)、おたがいに還元されえない。一方の様式を他方へ還元しようとしたり、事を全部一方に負担させておいて他方を無視しようとしたりする試みは、必ずや思考の豊かな多様性を捉えそこなうことになる³⁾」。つまり、二つの思考様式は、各々が規準や原理をもち、一方の様式を他方へ還元しようとし、事物をすべて一方に負担させ他方を無視するという試みを否定するものであった。それは、たとえば、論理—科学モードでは、言語的特徴の他にも、数や図形といった知的文化的な形式を提供することにより、ナラティブ的思考を補うことができるといった相補的な関係性であった⁴⁾。このように二つの思考様式に対しては、「思考についてのナラティブの様式と、ナラティブの『テキスト』や談話とを明確に区別することは不可能であるということが解った。それらは互いに形を与え合う。それは思考というものがそれ自身を表現し、結局はそれに形を与えることになる言語というものから逃れられないのと同様である⁵⁾」と強調するように、ブルーナーは論理と物語を不可分の関係として認識した。

以上をふまえると、彼は論理—科学的理解に向けての作用を物語の形態に変換し、ある答えが出された科学やその解答に重点を置くのではなく、科学の問題解決のプロセスを重点化させるテクノロジーとしてナラティブ的思考様式を着目した。その際に必要となるのは、明確な答えに対しての挑戦的な質問であり、それをきっかけに、自分が知っていることは何かについての反省と熟考をもたらす、そのプロセスに「所与の情報を超えて進む」というコンセプトを強調した⁶⁾。それは学習の核心は最も少ないものから多くを得ること、すなわちブルーナー(1973) *Beyond the information given*. で示されたコンセプト、あらゆる良き教授プラン、あらゆる良き学習—教授の出会いの核心は自分が理解したことについて考えることによる既知から未知への飛躍が反映されていた。このように、論理—科学とナラティブの調和的理解により、科学としての物語、物語としての科学という双方向での思考を提案するのであった。

2. フォークサイコロジーとナラティブ

Act of Meaning.『意味の復権』では、ナラティブ論を展開するにあたり、1950年代から始まる認知革命の省察から論じられていた。ブルーナーは認知心理学における革命を、「心」と「志向性」への奪回として捉えていた。しかし、そうした意図や主旨とは異なり認知心理学が、計算主義的な情報処理理論に依拠する狭量な研究の細分化に終始し、本来の人間研究から外れ他の人間諸科学から隔離されたことを批判し、再革命を求めた。再革命に求められた概念は、人間の心の情報処理や計算可能性ではなく、認知科学が捨象してきた「意味」の問題に立ち帰ることであった⁷⁾。「意味」とは人間が生きる世界で個人の中に存在するものではなく、文化的に形成し共有されるもので、ブルーナーは、この「意味」の問題を文化的観点から捉える手がかりとして、文化心理学の基礎となる「フォークサイコロジー (folk psychology)」を提案した。そして、認知革命の中心過程としての意味作成と、それに基づくフォークサイコロジーのキーコンセプトとしてナラティブが想起された。

文化心理学は「行動」ではなく「行為」を対象とし、志向性に基づくその対応物としての状況の中に位置づけられた行為、つまり文化的環境の中に、関与者と相互に影響しあう志向的状态の中に位置づけられた行為の研究である⁸⁾。フォークサイコロジーは、他者との相互作用で他者の心の動きや働きに関して直観的な理論で、人間の振る舞いに対する文化的根拠⁹⁾として検討し、以下のように強調した。

フォークサイコロジーとは、人間がいかに「暮らしていく」のか、われわれ自身の心と他の人びとの心はどのようなものなのか、ある状況下での活動がどのようなものと予測できるのか、それぞれの文化に可能な生き方とは何か、どのような他者と関わっていくかなどについて、それらを多少とも関係づけ、標準的な形で述べるものである。われわれは自分たちの文化のもつフォークサイコロジーを早期から学習する。獲得したその言語の使い方や、共同体での生活に必要な対人交渉を取り結ぶことを学習しながらそれを身につけていくのである¹⁰⁾。

ブルーナーは、志向性をもって生きる人間が、他者との相互作用の中で生活をどのように展開し、意味づけていくか、という問題に対して、ナラティブの原理を適応させ、同時にフォークサイコロジーの認知的システムを統括する根本的な原理としても強調した。

ナラティブの特性は、獲得した言語の使い方や、共同体での生活に必要な対人交渉の学習を通して身につけられるもので、物語的文脈における規範や通常からの逸脱を説明する時に物語的説明が活性化すると考察した。また、物語における心的表象形式としての言語は、他者の行為や表現によって、また人が相互に干渉する社会的文脈によって引き起こされる生得的な表象として捉えた。これはフォークサイコロジーの原初的な形を保持しており、生活のなかで子どもが社会的相互作用を調整するときに現れる。したがってブルーナーのナラティブ論における基本的概念は、コミュニケーションによってもっとも身近にあり、もっとも力強い談話形式の一つとしてあらわれることを主張した¹¹⁾。

「文化は心の構成物であって、文化の中で実現によって意味は私的かつ内閉的であるよりも一般のかつ共同体的な形態を成す。したがって人間の生や心を決め行為の基底にある志向的状态を解釈可能な体系に位置づけることによって行為に意味を与えるのは、文化であって生物学的なものではない。それは文化にあるシンボリックな体系（談話、論理、物語）のパターンや相互依存的な社会生活のパターンを考えることによってなされる¹²⁾」。このように、文化的営みにおけるナラティブを明確にし、解釈することが、ブルーナーの課題として取り組まれた。そのなかで、教育に対する認知心理学的アプローチに変わる新たな方法として、文化心理学的なアプローチを提案した。

ブルーナーは、子どもたちの興味や注意が行為により支配されていること、そして風変わりな事柄への注意を集中し、その情報を処理するレディネスが早くから備わっていること、時系列を標準化した形で保持すること、全体的な音声により見通しをもつこと、これらの能力が物語的道具の使用によって、早期に豊富な装備をもたらすことを確信した¹³⁾。したがって経験を物語ることによって言語獲得プログラムの優先性と特性を確固たるものにするには、幼児においても可能であり、幼児が言語以前の早期から物語的意味へのレディネスを備えていることを主張した。

フォークサイコロジーは、人間の行為や価値観を規定する共有の心理で、一つの文化において大人・子どもを含めて支配する体系を問題とし、志向性、意図、価値観を反映するものであった。そして人間の生活における意味の作成を文化的行為として位置づけ、意味という概念がナラティブの意味を構成し、ナラティブもまた幼児の言語獲得においてレディネスをもっている。つまりフォークサイコロジーは文化心理学に基づく社会構成主義的な学習へのキーセンテンスであると

同時に、自らが参加する伝統的な語りや解釈を通して、ナラティブという力の装備を示唆するものであった。

3. 文化と教育におけるナラティブの意義

ナラティブは、諸科学の発見や意味の構築において不可欠であると同時に、文化と教育との関わりにおいても考察された。文化心理学から捉えた教育の課題は、子どもが社会や生活へと参入するにあたって文化や教育がどのような役割を果たすのか、教育そのものが文化としてどのような影響を及ぼすのかということであった。ブルーナーは、教育への文化的アプローチの必要性和心の形成という観点から、ナラティブの検討を進めた。

ブルーナーは、教育を個人の心と文化が交差する所に根差すこととして掲げ、日々の談話や対話にみられるナラティブの解釈に基づき、現実をナラティブとして思考するものとして追究した。彼は科学を創造する過程の一つとしてナラティブを認識し、ナラティブに含まれる一連のストーリーは解釈の循環によって意味づけられることを主張した。そしてストーリーは説明されるものではなく解釈されるものとして扱い、ナラティブとストーリーの典型として、以下のように指摘した。

ストーリーとナラティブについて一般的なことを少々述べておきたい。我々が自分の体験や知識を体制化する際、最も自然で最も早期からあらわれるやり方はナラティブの形をとっている場合が多いようだから。螺旋的カリキュラムにおけるアイディアの理解のしかたは、初期、移行期、そしてすべてが把握される時期において、これらのアイディアが具体的にストーリーかナラティブの形態の中であらわれていることに依拠していることもまた真実であろう¹⁴⁾。

ブルーナーの考察は、具体的なアイディアを談話で話すべきかどうか判断する理由、あるいは初めにその話を語るきっかけとなった「不均衡」を調整し、解明することであった。そして現実をナラティブとして解釈するあり方として、世界を構成し理解するのは科学的方法だけでなく、ストーリー化することによって行為、所作を意味づけ、ナラティブ的に現実を構成する仕方を強調した。ナラティブ的解釈における現実世界の普遍的特性として、ブルーナーは以下の9つを掲げた。

①人間の関与する時間の構造

ナラティブを把握する基礎には、時計時間によるものではなく、時間的制限の中で起こる人間の「心的モデル」に関連した諸行為によって束縛される。

②ジャンルの個性

ナラティブを構成するストーリーはいくつかのジャンル（喜劇、悲劇、ロマンス、アイロニー、自伝など）に振り分けられ解釈される。したがってナラティブの個性は様々なジャンルの機能を満たすことで達せられる。その際にジャンルとはテキストを解釈する一つの方法であり、コミュニケーションするための文化的に特殊化された意味づけの方法でもある。

③行為には理由が在る

人のナラティブにおける行為は、その志向状態（信念、願望、理論、価値など）によって動機づけられている。しかし、志向状態がナラティブのすべてを決定するわけではない。ナラティブには自由の要素、因果を断ち切ることができる。志向状態は物事の原因とはならず、原因には行為の選択があり、それには責任が伴う。つまり、ナラティブにおいて求められるのは行為の背後にある志向状態で、物語は原因ではなく理由を求める。

④解釈学的組成

どのストーリーも唯一の独自の解釈をもっているわけではない。したがって論理的真理を除いて、特定の「読み取り」が必要かどうかを決定する合理的な手続きは存在しない。また特定の読み取りを証明するいかなる経験的方法もない。このように解釈学的分析の目的は、ストーリーが何を意味しているかについて、納得でき、矛盾ない弁明をすることであり、そのストーリーを構成する個々の事柄に調和した読み方をするのである。

⑤暗黙の規範性

規範は慣習化され、暗黙化し、倦怠の原因となる。ナラティブの創造者は、当然とされていたことを再び新鮮なものとして受け取らせ、それによって文化的な力を身につけることができる。

⑥指示の曖昧さ

ナラティブはそれが指示する事実を創り出し構成するが、哲学などの指示に比べ曖昧である。

⑦トラブルの求心性

ストーリーは破綻を軸に転回する。そのことはナラティブの現実においても同様で、語るに値し、解釈に値するストーリーとは、トラブルの中に生まれる。その形は歴史的、文化的にみても一回限りではなく、同一のストーリーでも解釈の仕方、余韻など

も含んでいる。

⑧固有の折衝可能性

ストーリーは本質的に競争性を持ち、その競争性がナラティブを文化的折衝の中で成長させる。各々の解釈の相異による争いを加減しつつ受け入れ、それは説明や証明よりも簡単なことである。

⑨ナラティブの歴史的拡張

人生は一つの自己充足的ストーリーの継続ではなく、それ自身の基底においてナラティブ的である。歴史の拡張と同じく、古いものが新しいものへと刷新される出来事を捉えそこに自己や意味を構成していくかが課題となる¹⁵⁾。

ブルーナーは、現実への意味解釈として物語的解釈を提案した。ナラティブによる仮説を紡ぎ、検証、修正、例外を考えることが新たな科学の形態として発見を促し、既存の科学として知識を広めるだけでなく、新たな科学を創造する過程こそ重視すべきであると彼は強調した。同時にナラティブを媒介とした学習の過程は科学を学習することだけでなく、非合理的な意味形成を含め一つの文化を学ぶことと位置付けた¹⁶⁾。

このような文化とナラティブの観点から導かれる教育は、科学的方法を教えることだけではなく、子どもにナラティブ的現実の中に競合することに対応するための必要なメタ認知的センスを創造する機会を与えることが目的であった。それは人間の生活が科学だけではなく、文化を学ぶ連続に他ないことを示すものであり、その生活のなかで個人の世界を創造する思考と感情を援助するものとしてナラティブの意義を提案した。

4. ストーリーの効用と解釈

ブルーナーは、これまでの計算主義を核とする認知心理学に対するオポジションとして、意味と文化の心理学を提唱してきた。そのなかで日常生活におけるナラティブの役割について文化を学習する過程の一つとして論じてきた。ナラティブ的解釈では、「話し手」が「聞き手」に対して「語る」という行為が、ある事象の解釈による意味形成の重要な手段となり、文化で生活する人間の行為を規定するものとして提案された。その様式は上述した二つの思考様式における論理科学的とナラティブの相互作用に認められる。そしてブルーナーは、ナラティブにおける個別のストーリー（法廷、文学、自己（自伝））の分析や解釈に関する考察で「二重の景観（dual landscape）」を挙げ、ストーリーの解釈を深化させた。それは、展開されるストー

リーの中で、作り手からみた視点の景色、ストーリーの主人公からみた景色、その他の登場人物からみた景色との複雑な絡み合いを通して、新たな世界観や解釈を導き出されることを提案した。彼は「二重の景観」を含んだ優れたストーリーの条件として、様々な角度からの解釈を可能とし、理解を拡大させるもの、ストーリーが規範から逸脱し、予期していた状態からの破綻によって展開されるものなどを挙げ、私たちの生活において計画や予期のもたらす不確実な結果を扱う手段を与えてくれると主張した¹⁷⁾。

そして「なぜ、ナラティブなのか」という問題提起においてナラティブのもたらす機能、効用について以下のように強調した。

文化にあるナラティブは、民話、時代遅れの物語、進化する文学、ゴシップといったものでさえも資源として、文化が生み出す不平等を慣習化し、それによって文化の不均衡と不一致を内包し存在する。それは人間がいきる普通の状態（普通の人々が普通の場所で普通の理由で普通のことをする）からの破壊によって、ナラティブのもつダイナミズムが発揮され、それによって予期せぬ出来事や違和感を解釈することを可能にする¹⁸⁾。

ブルーナーにおけるストーリーの効用は、幼児期から自己形成と他者関与の過程においてアイデンティティを育成し、自身を物語ることによって強化されることを基礎として構成された。そして、個々のストーリーを共有し解釈することで、共同体、文化的結束の促進だけでなく、偉大な契機を創造することを強調した。

おわりに

以上、ブルーナーにおけるナラティブ論の骨子とその主題、解釈、効用について明らかにした。ブルーナーは、1980年代以降、認知革命の本質である「意味形成」に焦点を当てた。その一つの方略としてフォークサイコロジーに着目し、個人が属する文化にある自分自身と他者の存在と行為を、どのように意味づけていくかという問題に臨んだ。フォークサイコロジーはそれ自体がナラティブやストーリーの形で遂行され、それは幼児が文法の形式を習得する根源であると主張し、我々が生活する世界はナラティブのルールとその骨組みによって構成されることを提案した¹⁹⁾。

ナラティブの語義として彼は、物語、語り、談話、ストーリーなど、文学的な様相、対話としての様相、

内言としての様相など様々な意味を包括して捉えていた。そして論理—科学と物語という二つの思考様式として展開した。彼はナラティブ的思考様式を用いて自己や他者との「語り」という行為を重視した。そのためナラティブ自体を科学や論理、物語や語りなどの所作を含み構成した。それは論理と物語を対照することによる明確な定義ではなく、ブルーナーの著作の訳者である岡本(2004)が「個々の事象を、一つのストーリーの中に位置づけることによって意味づけ、そのストーリーをもって、世界や自己自身を代表させていく」となみ(もしくはその所産)²⁰⁾としてナラティブを定義するように、ブルーナーのナラティブそれ自体が一つの文化的営みとして理解される。したがって、ブルーナーのナラティブ論は、科学と物語という二項対立ではなく、相補関係による世界や文化の構築のための方法なのである。

では、なぜブルーナーは、科学—論理とナラティブとして二分した形で思考様式を提案したのか。二つの思考様式の背景には、心理学における「心」、「意味」を取り戻す意図があった。そして人間の意識過程(物理的的刺激と感覚)を関数的、計算的なコンピュータのメカニズムによって科学としてきた近代心理学を批判し、ナラティブ的思考様式によって、実験の解答に物語的特性を見出し、人間の意識の表現へと反映させることが目的であった。このことが、科学と物語という区分をさせる契機となり、二つの思考様式として反映され、これまでの計算主義的な心の捉え方と心の意味の復権というコンセプトにおいて、メタファーとして二つの思考様式が提案されたのではないか。いずれにせよ、前述したように科学と物語を思考様式として理解する場合、それを寸断し、対照化することではなく相補関係として解釈することにブルーナーのナラティブ論の特徴が示唆される。

ブルーナーの提案するナラティブ的思考様式は、ナラティブ研究者であるラボフ(Labov, W.)が示すような談話自体を構成する文節から、意味保持を系列的に分析するやり方では、一つの思考様式としてナラティブとして捉えた場合には不十分であった²¹⁾。ブルーナーは、グッドマン(Goodman, N., 1978)の「現実とは作られるのであって、見つけられるのではない」という世界観に基づき、人間の心的活動や人間の記号言語によって世界が実在し、その人間的諸事象の系列を表現する手段としてのナラティブを重視した²²⁾。そのため彼のナラティブ論は、科学によって生み出される実在とストーリーによって産出される無数の形態を網羅し、因果の関係を語り、ひとつの事象における多種多様な解釈を許容した。それはオルソン(Olson, D.,

2010)が示すようにナラティブ—元論ではなく、ナラティブという概念に対する明確な意味や定義を固定化せず、言葉や言語を基本としたコミュニケーションにナラティブ的思考を見出し、論理との折衷、統合を主旨とした。そのため、ストーリー、語り、ディスコース(談話)、ライフストーリー、日記、歴史、法、自伝など言語を通したさまざまな要素を包含して理解、解釈することが求められ、その過程で科学や意味形成することが肝要であった。

教育におけるナラティブ論の特質は、ナラティブへのレディネスやその効用を踏まえたうえで、ナラティブ的思考が軽視されている現状に疑問を投げかけた。ブルーナーは、文化心理学のテストフレームとして教育を位置づけた。それは、ある教育観は、それを考えた人の文化観との相関関係にあり、教育それ自体が文化を知るための窓口となることを意味する²³⁾。そして、生活する文化においてナラティブ的思考による解釈が、文化に基づく世界観の理解を可能とし、それを通して相互学習社会、文化共同体としての学校や学級の創造こそ求められる教育像として彼は示唆した。したがって、教育におけるナラティブは、物語という表現形式で経験を表す能力として単純な子どもの遊びに留まるのではなく、文化の中で営まれる生活の大部分を支配する意味形成の手段として位置づけた。

またブルーナーは、日々の生活する環境や自然においてナラティブ的思考様式を萌芽させるレディネスが存在し、物語的構造は言語による表現を可能になる以前から、社会的実行行為の中に備わっていることを提案した²⁴⁾。子どもは、ナラティブを使用することにより、生きた現実の中で言語と物語的な談話を使用することによって、どのように文化に参加するようになるのかを明らかにすることができる。人間が言語を通して構成される存在であり、物語的に構成されることを強調するブルーナーは、人間の生得的傾向として物語のレディネスが意味づけや文化への参入において重要であることを示した。子どもが世界についての一つの解釈版、つまり心理的に、自分自身の居場所を描くことができ、個人世界を創造する思考と感情の様式として、また子どもたちが文化の中にアイデンティティを構築し、意味作成の媒体としてナラティブの重要性を示した。加えて優れたナラティブはストーリーや語られる経験を超越して、世界を解釈する新たなモデルを提供し、その活動自体は幼児から発現されることをブルーナーは主張した。

このように、子どもが事象を認識し学習する過程において、物語的発見、物語的思考、物語的意味、物語的解釈として物語を適用させることがブルーナーのナ

ラティブ論に込められていた。

科学者であれ、生徒であれ、探求している事象を、ナラティブ形態に向けることによって自分の見方でのものを見るとき、何が規範的で期待し得るのかを鮮やかにし、それによって基本から外れたものが何で、ゆえに何を解く必要があるのかを判別させる、この科学を創造する過程もまたナラティブである²⁵⁾。

したがって教育過程において論理がナラティブの足場となることは容易に予想され、論理モードを言明それ自体の規則として捉えたとき、ナラティブ・モードはその行為に意味が付随したものと捉えることができる。そして論理と科学を物語として解釈することは、世界を解釈する普遍的様式であり、ナラティブこそ新しい認知革命においても、また学習活動としても必要不可欠であることを主張したのであった。

昨今では、教育現場において談話や記録などのナラティブを子どもの「学び」の物語として解釈する研究がなされている。今後は、ブルーナーの物語のレディネスを踏まえた、乳幼児や幼児における日常生活の物語を「学び」として子どものナラティブ（発話、談話、作文、物語など）を解釈し、それを媒介とした教育者のナラティブ（記録、連絡帳、ドキュメントなど）を保護者や他の教育者と共有し、分析し、理解し、討論することが肝要であるように思われる。「学び」の物語として、ブルーナーのナラティブ論がどのように作用するかが今後の課題として提案される。

【注】

- 1) Bruner, J. (1997) Celebrating divergence: Piaget and Vygotsky. *Human Development*, 40, pp.60-73
- 2) Bruner, J.S. (1986) *Actual Minds, Possible Worlds*, Harvard University Press, pp.12-14. ブルーナー著 田中一彦訳 (1998) 『可能世界の心理』 みすず書房 19-22頁
- 3) Ibid. pp.11-12. 同上 16頁
- 4) Ibid. pp.15-18. 同上 20-25頁
- 5) Bruner, J. (1996) *The Culture of Education*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, p.133. J.S. ブルーナー著；岡本夏木、池上貴美子、岡村佳子訳 (2004) 『教育という文化』 岩波書店 180頁
- 6) Ibid. p.129 J.S. 訳書 175頁
- 7) Bruner, J., (1990) *Acts of meaning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, pp.1-pp.35

ブルーナー著；岡本夏木、仲渡一美、吉村啓子訳(1999) 『意味の復権：フォークサイコロジーに向けて』 ミネルヴァ書房 1-45頁

- 8) Ibid. pp.18-19 同上 27頁
- 9) Ibid. pp.12-14 同上 18-19頁
- 10) Ibid. p.35 同上 50頁
- 11) Ibid. pp.50-52. 61-68頁
- 12) Ibid. pp.33-34 同上 48頁
- 13) Ibid. pp.75-80 同上 107-113頁
- 14) Bruner, J., (1996) op.cit., p.121 前掲 岡本夏木、池上貴美子、岡村佳子訳 (2004) 164頁
- 15) Ibid. pp.133-149 同上 181-205頁
- 16) Ibid. pp.132-133 同上 180頁
- 17) Bruner, J., (2002) *Making Stories, Law, Literature, Life*. Harvard University Press, pp.24-28 岡本夏木、吉村啓子、添田久美子訳 (2007) 『ストーリーの心理学 法・文学・生をむすぶ』 ミネルヴァ書房 32-36頁
- 18) Ibid. pp.91-107 同上 124-142頁
- 19) Bruner, J. (1990) op.cit., p. 137-138 訳書 194頁
- 20) 岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子訳 (2004) 『教育としての文化』 岩波書店 311頁
- 21) Bruner, J. (1996) op.cit., p.133 訳書 181頁
- 22) Ibid. pp.19-20. 同上 25頁
- 23) Ibid. pp.x-xi 訳書 vi-viii 頁
- 24) Bruner, J. (1990) op.cit., pp.137-138. 訳書 194-195 頁
- 25) Bruner, J. (1996) op.cit., pp.125-127. 訳書 169-171 頁

【参考文献】

- Goodman, N. (1978) *Ways of Worldmaking*. Indianapolis: Hackett. 菅野盾樹・中村雅之訳 (1987) 『世界制作の方法』 みすず書房
- 能智正博 (2006) 『〈語り〉と出会う 質的研究の新たな展開に向けて』 ミネルヴァ書房
- Olson, D. (2010) "Literacy, Literature and Mind—Jerome Bruner and Narrative Turn in Cognition." 『質的心理学研究』 第9号
- やまだようこ編著 (2000) 『人生を物語る一生成のライフストーリー』 ミネルヴァ書房
- やまだようこ (2006) 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念—ナラティブ・ターンと物語自己—」『心理学評論』 Vol.49 No.3 436-443頁
- (主任指導教員 土橋 寶)